社会見つめ

「第7回みんゆう新聞感想文コンクール」には3部門に県内63校から951点の作品が寄せられ、審査の結果、各部門で最優秀賞1点、優秀賞3点、入選5点の入賞作品と学校賞3校が決まった。表彰式は12日、福島市の福島民友新聞社本社で行われる。最優秀賞、優秀賞の受賞作品を紹介する。（原文のまま）

コンクールは、小・中学校で新学習指導要領に「新聞の活用」が明記されたのを機に、児童・生徒の広い視野と豊かな心を育む生きた教材として新聞を活用、確かな表現力を身に付けてもらう目的で実施している。

「新聞掲載記事を読んでの感想」をテーマに、今年5月から9月までに福島民友新聞をはじめ日刊紙に掲載された一般記事や社説、コラム、連載企画、こども新聞などを読んで感動したこと、興味を持ったこと―などの感想文を募集した。今回も、震災後の復興の記事をはじめ、戦争、リオオリンピック、パラリンピックに関することなど多岐にわたり、記事を読んで感じたこと、自ら体験したことなどを踏まえての作品が多かった。

審査長を務めた福島地区中学校教育研究会国語部長の西牧伸弘福島市立岳陽中校長ら審査員が厳正に審査し、入賞作品を選んだ。

審査員次の通り。

審査長＝西牧伸弘（岳陽中校長）▽副審査長＝小原吉雄（下川崎小校長）▽審査員＝佐藤尚美（渡利中教諭）菅原千佳（平野中教諭）佐藤美穂（梁川中教諭）富田房子（梁川中教諭）鈴木哲司（東和中教諭）佐藤香織（小浜中講師）渋谷朋子（野田小教諭）大塚欣之（五十沢小教頭）橋本康子（二本松北小教諭）菊池克彦（福島民友新聞社編集局長）菅野芳美（同事業局長）

各部門の入賞者

【小学3・4年生の部】
◆最優秀賞
蔓谷琢也（湯本一4年）
◆優秀賞
武田龍斗（柴宮4年）
西山隼太朗（桜4年）
深瀬　唯（福島大付4年）
◆入選
桜井亮人（大島3年）
青田　紬（太田4年）
江井あかり（鶴城3年）
菊地悠仁（桜の聖母学院3年）
八島莉星（岡山3年）
【小学5・6年生の部】
◆最優秀賞
岡部明希（野田5年）
小関夏穂（関柴5年）
占部太握（桜の聖母学院6年）
◆入選
武田隼輔（柴宮5年）
豊岡奏多（桜の聖母学院5年）
斎藤里桜（清明6年）
丹治莉沙（桜の聖母学院6年）
草野夏海（平一6年）
【中学生の部】
◆最優秀賞
渡辺弥生（二本松一2年）
◆優秀賞
竹田陽登（福島大付2年）
宮原知大真（原町二5年）
宮原由気人（原町二3年）
鈴木麻由（郡山四3年）
◆入選
二瓶翔太（福島大付1年）
小沢優葉（福島大付2年）
今西　海（福島四2年）
八重樫佑希（野田1年）
冨岡侑晟（石川3年）
【学校賞】
泉北小（いわき市）
桜の聖母学院小（福島市）
鹿島中（南相馬市）

◆最優秀賞

「灯は消えない」

二本松一中2年　渡辺　弥生さん

「たいまつの火は消えず」。ある日開いた新聞の題字が、目にとびこんできた。たいまつ。赤々と熱く燃えさかる炎。いったい何の火のことだろうか。私はその記事を読んだ。

むのたけじさん。八月二十一日、百一歳というご高齢で亡くなった「反骨のジャーナリスト」と呼ばれた方だ。戦時中、新聞記者だったむのさんは、従軍記者として戦場を取材しながらも、読者に「真実」を伝えることができなかったそうだ。その自責の念から終戦の日に会社を辞め、故郷の秋田県で週刊新聞「たいまつ」を創刊し、以来、戦場での真実、戦争絶滅を伝え続けてきたそうだ。

「日本はもはや『戦後』ではない」という言葉を聞いたことがある。でも、違っていた。むのさんの中では、まだ日本は「戦後」だった。戦争は、終わっていなかった。だから、また過去の過ちを繰り返そうとする人類に、全身で、命全体で反戦を訴え続けたのだろう。

「戦争」とはきっと、戦場での殺戮や、火の海のことが全てなのではない。真実が曲げられ、人々が自由に生きられなくなったとき、すでに戦争は始まっている。それは、私達の繰り返す日々の中に潜んでいる。突然始まるわけではない。力の下に黙り込む人がいるとき、「戦争」はひそやかに幕を開けるのだ。

それは、私達から遠いところにあるのだろうか。力に押し潰され、息を殺すようにして生きてはいないと、はっきり言えるだろうか。家庭、学校、職場、社会。私達の身近なところに、戦争の胞子はまかれている。メディアで見聞きする、世界中で起こっているテロや内戦。むのさんの訃報を伝える記事の隣には、オリンピックの難民選手団や南スーダンの人道危機についての報告がある。辛く悲しいニュースに慣れてしまっている日常を、私達はどう考えればよいのだろうか。

むのさんは、こうも言っている。戦争は、「三六五日の生活の中で考え続けないといけない」と。そして、生涯を走り通した。暗闇を照らすたいまつを掲げ、皆を引っ張って。

むのさんが灯した火は、たくさんの人々の心で燃え続けている。そして、これからも灯は人々の手から手へ渡され、燃え続けていくだろう。燃やし続けていかなくてはならないのだ。私達の手で。これまで私は、「戦争」という存在から目を背けないでいよう、と心がけてきたつもりだった。しかし、戦争がどうやって始まるのか、言論の自由とは何か、今まで知らなかった戦争の「本当の形」について、これらの記事から初めて考えることができた気がする。私は戦争の実際を知らない。しかし、知ろうと努力し、想像し、考え、灯を少しでも大きくすることはできるかもしれない。この夏むのさんが灯してくれた火は、今も私の心の中で、赤々と燃え続けている。

◆優秀賞

「異なる見方をひろげる新聞」

福島大付中2年　竹田　陽登さん

「うわっ。相模原の痛ましい事件の記事載ってるから民友新聞見てみな。」

と朝刊を僕に渡す母。思わず記事に僕の目は釘付けになりました。そう、それは平成二十八年七月二十六日、相模原市の知的障がい者施設で十九人もの無防備な方々が殺害される衝撃的な事件でした。あまりの卑劣な事件に僕はあっけにとられました。さらに読み進めていくと、容疑者の主張として、障がい者なんていなくなればいいという独善的で極端な考えがありました。もちろん大量殺人であり許されない事件です。しかし、僕が最も記事を読んで怒りを感じたのは、容疑者が障がい者を著しく差別視していたという点です。

福島民友新聞の七月三十一日の記事には、障がい者の家族について取材した記事がありました。それは、障がい者やその家族だからといって不幸であると決めつけないでほしいというものでした。僕は、全てに健康で障がいをもたない人に比べて、障がい者は不幸なはずだと思っていました。僕だけでなく、多くの健常者は、障がい者や家族は可哀想だと決めつけてしまいがちだと思います。ところが、記事によると障がい者にとって、日常の少しのうれしい出来事が希望になり支えになるそうです。また、苦労はあれども、決して不幸ではないとのことでした。その記事を読んで僕は、はっとしました。確かに、僕は障がい者というだけで不幸だと思い込んでいました。このような思い込みを変えていく必要があることに気付いたのです。新聞を読んで、今までの自分の捉え方以外の、見方や考え方ができることに気付くことができました。

では本当に障がいをもつ本人は、不幸だと感じていないのでしょうか。僕は総合の学習の中で、眼に障がいをもつ佐藤智美選手にインタビューをしたことがあります。陸上選手である佐藤選手はとても明るく、少なくとも不幸には見えませんでした。佐藤選手が自分を支えてくれた多くの人のおかげで陸上を続けていると話していたのが印象的でした。佐藤選手自身は、周囲と自分が異なることについて、少し不器用だけど普通に生活できる、とあまり気にしていなかったそうです。この話の内容からも、障がい者を当事者でもない外からの立場で一方的に差別し、決めつけることは大きな間違いだと改めて思います。

今年はリオオリンピック開催です。オリンピックの年には障がい者によるパラリンピックも開催されます。目標をもって練習に励み前向きに生きている世界中の障がい者の方々がいます。この痛ましい事件を機に、差別意識を捨て、理解し合う社会づくりを日本は進めていかなくてはいけないと強く思いました。そして僕の見方を広げてくれる新聞をこれからも、考えながら読み続けていきたいです。

中学生の部

◆優秀賞

「過去を未来に生かすために」

原町二中3年　宮原　由気人さん

炭化するまで焼かれた頭蓋骨。湯呑み茶碗に手を伸ばした状態の遺骨。戦後七十一年たっても、沖縄の洞窟からは放置され、身元も分からないままの遺骨が見つかる。沖縄だけではない。硫黄島、海外に出兵したまま亡くなった約二百四十万人のうち、日本に戻っていない遺骨は百十三万人以上あるという。

僕の曽祖父も、その一人だ。シベリアのどこかに今も眠っているらしい。「戦死の報告」で届いたのは、一枚の紙。それから、こぶしよりも小さな石がたった一つだけ入った箱だったよ。」と祖母は教えてくれた。「どこで、どんな死を迎えたのか」、「何を思いながら亡くなったのか」。死んだ時の様子も分からず、遺骨すら手元にもどらなかった曽祖父。満州からなんとか日本に帰ってきて、戦争が終わってからも女手一つで苦労して祖母を育てた曽祖母。「せめて、父と母を同じお墓に入れてあげたいけど……。」とお墓参りの時に言っていた祖母。戦争の悲しみは、ずっと消えることはないのだと改めて思った。

沖縄の洞窟に残る遺骨にも、待っている家族はたくさんいるだろう。甲う者もなく転がる遺骨を、具志堅さんはずっと集めてきた。「遺骨の収集とは、〜『戦争とは何か』を手でさわって考えることを意味する」と具志堅さんは話す。そして「あの時代に生きていればこの骨は自分だったかもしれないと思う」とも。殺し合いをしながら、悲惨な死を迎えたいと誰が思うだろう。そんな思いを僕はしたくはないし、家族にもさせたくない。

しかし、戦争をなくすのは、簡単なことではない。リオオリンピックで初めて結成された「難民五輪選手団」。戦火を逃れて参加している選手がいる。他国に逃れる事もできず、今も内戦で苦しんでいる人々もいる。

では、戦争を起こさないためにはどうすればいいのだろう。広島を訪れたオバマ大統領は、「過去から学び、戦争が起こらない世界を作っていくことができる」とスピーチした。過去を振り返ると、戦争の原因は領土、経済、宗教などいろいろある。たくさんの人の思惑がからむ中、全てを解決して戦争をなくすのは、とても難しいことだと思う。かつて日本も、戦争で他国の人を傷つけ苦しめた。しかし、戦後は百九十以上の国や地域を経済的、技術的に支援し、みんなが幸せになる手伝いをしてきている。信頼関係を築き、平和を創る努力を続けることが、戦争をなくし、平和につながっていく道ではないかと思う。

戦争が終わっても、悲しみはずっと残る。大切な家族とふるさとを戦争で絶対に失いたくないと思った。だからこそ平和を創っていくのは自分だという自覚を持ち、「過去」も「今」もしっかりと学んで、平和につながる未来を僕はこれからも考えていこうと思う。

◆優秀賞

「長崎原爆の日に思う

〜未来に向かって〜」

郡山四中3年　鈴木　麻由さん

今年は、四年に一度のオリンピックイヤー。日本選手の大活躍が紙面を賑わす中、「長崎原爆の日」の記事が私の目に留まった。

戦後七十一年となる今年五月、オバマ米大統領が被爆地である広島を訪問した。投下国の現職トップが被爆地を訪問するのは初めてである。歓迎のムードやその演説内容に批判的な声があるのも事実だが、歴史的に大きな一歩を踏み出したことは確かである。

戦後七十年の節目となった昨年、私は郡山市中学生長崎派遣団の一員として、被爆地・長崎を訪問する機会をいただいた。記事の写真にあるどっしりと構えた「平和祈念像」。垂直に高く挙げられた右手は原爆の脅威、水平に伸ばされた左手は世界の恒久平和を意味し、軽く閉じた目は原爆犠牲者の冥福を祈っているそうだ。七十一年前のこの日。長崎は一発の原子爆弾によって、一瞬にして壊滅状態となった。そして、多くの尊い命が奪われたのだ。この大きな祈念像の前に立った私は、その時を想像した。どんなに恐ろしかっただろう。苦しかっただろう。無念だっただろう。どれだけ想像しても足りるはずがない。そう分かっていても、自分の中にある感情すべてを使って精一杯考えた――。この像にはあえて表情はないそうだ。しかし私には、当時の想像を絶する苦しみや悲しみを訴えるとともに、何不自由なく生活できる現在のありがたさを静かに語っているようにも思えた。

田上長崎市長は、平和宣言の中で「オバマ大統領が広島を訪問し、自分の目と、耳と、心で感じることの大切さを世界に示した」と述べている。あの日、長崎に起こったことを、自分の足で歩き、自分の目で見て、自分の耳で聴くことによって、私も全身で感じることができた。実際に訪れて感じることの意義を痛感した一人だ。そして平和の尊さを深く考えさせられた。帰る家があり、待っていてくれる家族がいること。おいしいご飯が食べられて、やりたいことが思う存分できること。今では当たり前だと思っていることが、どれほど幸せなことかを実感することができた。

こうしている今も、世界には戦争をしている国がある。核兵器を保有している国もたくさんある。決して、戦争や原爆を過去のことだと思ってはいけない。昨年、被爆者の平均年齢が八十歳を超えたそうだ。原爆を経験した方々から直接話を聞けるのは、私たち中学生が最後の世代と言われている。平和宣言の終わりにあるように、「被爆者の経験に耳を傾け、未来のために、過去に向き合う一歩を踏み出す」ことこそが、私たち若い世代の使命なのだと改めて強く感じた。

「平和の尊さ」をしっかりと胸に刻み、この青く澄んだ空がいつまでも続くよう、一歩ずつ力強く、未来に向かって歩んでいきたい。

審査長講評

福島地区中学校教育研究会国語部長

西牧伸弘（福島市立岳陽中学校長）

考える力　頼もしく

今年は、リオオリンピックが開催されたことから、オリンピック関係の記事を取り上げた作品が多かったのが特徴でしたが、県内出身タレントのエベレスト登頂成功や18歳選挙権等の話題性のあるニュース、戦争や東日本大震災からの復興について等の息の長いテーマをもった記事を扱った作品もあり、子どもたちが社会のさまざまな事象に目を向けていること、記事を通じて自分を見つめ考えを表現していることに頼もしさを感じました。

小学3・4年生の部門では、興味のあるテーマについて、記事を収集し、課題意識をもって追究していることを書いた作品や、同日に掲載された別のテーマの記事を比較して、自分の考えをまとめるという、新しい視点をもった作品があり、感心させられました。

小学5・6年生の部門では、記事をよく読み、解釈し、考えをしっかり述べている作品や、同じテーマについて二つの記事を比べ、自分の考えを深めている作品など、高学年らしい内容の深まりがみられました。

中学生の部門では、記事の選定にも、社会的事象に関心が高いものがあり、記事の趣旨をしっかりととらえたうえで、自分なりの視点、考え方、提案を展開するなど、さすがは中学生と感じ入りました。特に、最優秀を受賞した渡辺弥生さんは、5年連続の最優秀賞という快挙をなしとげました。彼女の作品は、「戦争」に対する考えにとどまらず、報道の本質をみごとにとらえ、それらに真正面から向き合った深みのあるものであり、審査員全員から高い評価を受けていました。今後もこのような素晴らしい作品が数多く寄せられることを期待します。

課題としては、誤字や脱字、文字の丁寧さ等、表記について読み手を意識することが大切であること。また、指定された字数を十分に活用して、内容を充実させること等が挙げられました。

子どもたちに思考力・判断力・表現力を育み、これからの社会を生きぬく力を身に付けさせるために、この新聞感想文コンクールのもつ意義は大きいものがあります。ぜひ、次年度も多数の作品が寄せられることを願ってやみません。